

熊楠評伝

和歌山が生んだ知の巨人・南方熊楠にまつわる人物譚

日本ペンクラブ会員リレー執筆 第一回

熊楠と源内

作家小中陽太郎



慶應義塾図書館所蔵

いくら博覧強記の南方熊楠でも、まさか平賀源内のなぞを解くヒントまで書き残してくれていたとは知らなかった。

ここ二十年来、平賀源内に取り組んでいる。これまた小生と源内などは南方と源内以上にミスマッチと笑われそうだが、源内の生地讃岐の志度寺の住職（医者）の十河章が平連（ベトナムに平和をー市民連合）以来の友、さらにここ高松の西日本放送朝九時からの「おはようホットライン」のコメントーターでお耳をけがして二十五年ということ、志度出身の本草学者（熊楠の先輩だ！）にしてエレキテルの発明者、そして戯作者の源内像をもとめて久しい。

さて「非常の人」（杉田玄白の墓碑銘）源内の生涯は謎が多い。わけても不可解なのはその死にまつわる逸話である。

源内は、門弟の盗みを誤解して、米屋のせがれを惨殺し、小伝馬町の獄につながれ獄死するのである。江戸の通人太田蜀山人は、「癡狂の萌ありけるにや」（鳩溪遺事）と語った。蜀山人といえは、昨日も、開業なった安藤忠雄設計の地下鉄東京副都心渋谷駅から明治神宮まで一駅乗って、太田記念美術館で、源内と交流深い太田蜀山人、「大江戸マルチ文化人交友録」を鑑賞してきた。奇しくも担当編集者は、四十年前、当時はまだ奇人扱いされていた熊楠を大学で専攻した男である。

さて蜀山人が、源内の死を「癡狂の萌」とみた証拠というのが、源内が書き遺しているこんな奇怪な絵のことである。

悪童めいた一人の少年が松の木の小便を流している。意味不明なのは、下を禪僧風の男が過ぎ行きながら、上を見上げて笑っていることである。これでは蜀山人ならずとも狂ったと思えない。それがちがうのである。

この絵のことを、なんと熊楠は、「一休、他人の手を借りて悪童を懲らせし話」（『烈公問語』）として紹介しているのである。烈公とは水戸の徳川斉昭である。斉昭が母親に何か話をしなさいと、言われて次のように語ったというのである。その話というのは……。

一休和尚行路のみぎり、傍らの樹に童子が一人上つていて、上から小便をかけた。そして、一休を見て、あはははと嘲った。ところが一休は、なにを思ったか、頭陀袋から小銭をつかみ出し、かの童子に与えた。よくやったぞよ。あわれ童子は、これは、いいことをしたと思ひ、誰か来たらまたしようと思ひ待ちかねているところに、侍がきた。そこで最前のごとく小便を仕掛けたところが、侍は怒って散々に打擲した。一休はわが手を濡らさず、他人に興味返しをさせたわけ、さすが一休と人は言ったとこういふのである。

そのあとで、これは一休が良くない、徳川斉昭、一休を批判した。斉昭はもし一休が本当に人の師ならば小便を仕掛けたときに、そんなことをしてはならぬと諷めねばならぬ。我は出家なれば打擲せず、他人に同然のことあらば命を失うべし、と教えるべきだ。なんぞや銭をやつて人をもつて報いさせるのか。

「この物語の趣意然るべからず、一休まことの志ならば、最前小便仕懸けられ候時、強く罵り叱つてわれはこれ出家なれば打擲に及ばず、他人にかよふの仕形仕るならば、命を失うべしと申し教え通るべきに、何ぞや銭を遣りて、人をもつて讐をす。好心浅からず、かよふのことに若輩の者心づくべきことや、幼童に語り聞かす物語にも、いと心得あるべきことなり」

しかし熊楠の博識はそれにとどまらない。この話の元は「塵添塚囊抄」にあり、孔子が山中を行くと、童子が木の上より尿を仕掛けた。孔子はよくやったと褒めて通り過ぎた。そのあと令尹というものが通りかかると、童子はまた小便をかけた。令尹は、おのれ天下の大害をなさんものとて頭を刎ねた。これを「孔子の腹黒」といふ。

そして源内の心根はこうだろう。世人は、源内にわざと江戸という体制に小便を仕掛けさせ、ひとときそれを面白がり、褒めそやし、そして挙句に殺してしまふ、と自分の運命を予告したのである。

こんなはなしをわざわざ紹介するところを見ると、熊楠は少年おもしろいやさしい心の持ち主であることがわかる。もつといえは教育は自分の手を使って懲らしめるべきで、人の手を煩わして自分だけ高見の見物はしてはならない、と諭しているともとれる。

これぞ熊楠教育論！

このことを教えてくれたのはエレキテルを展示する大企業の熊楠愛読者であった。

源内を求めて、書きあぐねていたわたしに熊楠は一挙に光を与えてくれた。

ところでわたしはいつたい、他人さまに小便をかけて叱られている少年なのか、人をけしかけてはくそ笑んでいる世間なのか、その目が光る熊楠である。

16



小中陽太郎（こなか・ようたろう）

作家、日本ペンクラブ理事、星槎大学教授。1934年神戸生まれ。幼時上海に育つ。58年東京大学フランス文学科卒。NHKテレビディレクターをへて、ベトナム戦争中、市民運動に参加。83～84年フルブライト交換教授として、ニューヨーク市立大学ブルックリン校などで日本のジャーナリズムについて教鞭をとる。日本ペンクラブで多くの国際会議の日本代表となる。またテレビ、ラジオで積極的に世論に語りかけ、とくに高松の西日本放送の「おはようホットライン」は20年を超える。志度寺住職と市民運動時代から交流があり、志度の平賀源内に取り組んでいる。著書「青春の夢—小栗風葉と恭太郎」、「ラメール母」、近著「天翔ける源内」（平原社）。

協力 日本ペンクラブ

南方熊楠顕彰館